

ヨーロッパ・アフリカ北部・西アジア原産。栽培され、北海道・本州に帰化した。

アケボノセンノウ(12) *S. dioica* (L.) Clairv.

ヨーロッパ・西アジア原産。栽培される。

シラタマソウ(13) *S. vulgaris* (Moench) Garcke

ヨーロッパ・アフリカ北部原産。明治年間に渡来し、栽培され、戦後各地に帰化した。草丈が小さく、茎ははい、海浜に生えるものはハマベマンテマ subsp. *maritima* (With.) A. et D. Löve という。

〔植物ニュース〕70. クロユリ *Fritillaria camtschatcensis* (L.) Ker-gawl.

高等植物の性表現はなかなか複雑であり、十分に調べられているとはいえない。高山植物として有名なクロユリの性についても、図鑑類にはふつう書かれていない。たゞ、私の知る限りでは松浦(1935)が、クロユリは *preandrously bisexual* ではないかと述べているのがクロユリの性について書かれた唯一のものである。つまり、クロユリは若くて小さな株には雄花をつけ、熟年になって鱗茎が大きくなると両性花をつけるというわけである。これは性転換現象にはかならない。

私は、性転換について確証を得たわけではないが、とりあえず、信大、京大、スミソニアン研究所の標本について、性表現とその頻度をチェックしてみた。その結果、クロユリには雄株と両性株があり、雄性異株であることが分った。同じユリ科でもシュロソウのような雄性同株(同一株に雄花と両性花をつける)とは異った性表現をするわけである。

地 方	雄株	両性株	地 方	雄株	両性株
アラスカ		1	北海道(低地)	2	7
アリューシャン		2	〃 (高山)	3	
カムチャッカ		2	北アルプス	8	7
東シベリア	1	2	中央アルプス		2
チ 島	2	3	南アルプス	11	4
サハリ ン	4		白 山	10	5

総計 雄株：両性株=41：35

こうしてみると、雄株がかなり多いものであることが分る。地域的に頻度の差があるか否かも興味深い事柄であろう。

京大の標本の検定には岡崎純子氏の手を煩わせた。深謝したい。文献の御教示を頂いた豊国博士と氏原博士、貴重な標本を貸与下さったスミソニアン研究所の関係者には厚く御礼申し上げる。(清水建美)

コケマンテマ(22) *S. acaulis* L.

ヨーロッパ原産。高山植物。昭和のはじめの頃渡来し、ロック、ガーデン用に栽培される。

本稿は、「新花卉」118号に掲載した記事を、「植物誌」原稿サンプルとして再録したものである。各種の項目に、標本番号、調査票番号、文献番号を加え、できれば種ごとの分布図が加えられればよいのではないかと思う。

〔新刊紹介〕浅田節夫、菅原聡編「信州のからまつ」A5判350頁、リンケイ新聞出版局、昭和58年2月。

信州大学農学部の浅田節夫先生が、この3月定年退官された。浅田先生といえば、カラマツ王国信州にあって終始カラマツ林業を指導され、カラマツ博士の名で知られ、かつ国際的にも国際林業機関連合カラマツ部会座長をつとめられるなど、斯界の第一人者として活躍された方である。その浅田先生の御退官を記念して、信州の「カラマツ林業研究会」の音頭とりで生れたのがこの本である。本書の構成は、次の3編からなる。

第一編 カラマツ研究の道——信州大学農学部造林学研究室——

先生の研究室の研究の歩みを記したもので、冒頭に先生御自身の筆になるカラマツ林研究の道(30頁)が掲載されている。これによると、先生の研究室には、カラマツの生理学的研究、生産生態学的研究、生態地理学的研究、植物病理学的研究と実に多岐にわたり、いずれの研究も林業生産に直結しており、それだけに、苦悩にみちた研究の道すがら実感されてくる。実際の学問の方法が教えられて、感銘深い。「現在、信州では、林業界をゆさぶるようなカラマツ林業の危機に直面しており、(この本が)カラマツ林業の蘇生に役立つことであれば……」という先生のお気持ちがひしひしと伝わってくるのである。

第2編 カラマツについての最近の研究——カラマツ林業研究会——

只木良也ほか「美ヶ原南西斜面におけるカラマツ林の植物季節学的考察」、原田文夫「カラマツの間伐技術」など11篇の論文が収められている。林学界の第一線の方々の執筆になるだけに、現在カラマツ林業またはカラマツ生態学において何が問題であるかを示唆してくれる。

第3編 カラマツ材の利用

上高地の河童橋を筆頭にカラー写真をそえての利用の実態報告となっている。(T. S. 生)